

チーズはどこへ消えた？

今年で退職される先生のお言葉に次のようなお話がありました。これまでの教職生活を漢字一文字にあてはめるとそれは「変」という字が適当ということでした。移り変わる「変化」に乗り遅れずに対応してゆくためには「ベース（土台とか基礎）」が大切であり、高専でまさに今学習している一般／専門すべての科目こそが土台なのだから、安心して勉学に励んでくださいというありがたいお話であったと思います。

中国から伝わった古い学問に易学というものがあります。「易学」＝「占い」のイメージがありますが、実際はかなり違うそうです。「易」という漢字は「かわる」「変化する」の意味があり、古くは「とかげ」の象形文字に起源があるそうです。私はまっさきに爬虫類のカメレオンを想像して納得することができました。この中に書いてあったことですが、「変わること」や「変わったこと」が本当にわかるためには、その正反対の「絶対に変わらない」部分をよく把握しておかなければならないそうです。先生のお話の「変化」に対応してゆくことと、大切な「ベース」(＝変わらないもの)によく当てはまると感じました。

題目の「チーズはどこへ消えた？」は少し古い1999年度の全米ビジネス書ベストセラー第1位の本のタイトルです。「変化」ということばで思い出しましたが、これから会社に入る学生はひょっとしたらどこかで出会うかも知れません。

読書と食事

小学校や中学校のとき、読書が大切ということをお母さんや先生からよく聞かされました。国語が苦手だった私はそのとき、国語の成績を良くするための方策だと思っていました。

最近開いた本に「読書」＝「心の食事」ということが書いてありました。肉体に食事を与えないと目に見えて衰えるように、心も自覚症状に乏しいものの「一日読まなければ一日衰える」ようです。心の食事は読書だけでなく日々の経験や人との関わりによるところが大きいようですが、実際には経験や関わりだけでは不十分だそうです。このことについて同じ読書でも性質は少し異なりますが、工学実験の「実習」と「理論」の関係にも同じことが言えるのではないかと思いました。実験中に何かを経験しても、そこで生じた感情とか疑問など、時間を割いて図書館や本屋で調べ（読書して）やっと自分のものにできたとき、はじめてそのテーマがその人の養分になるのだと思います。ここで大切なのは（とてもおもしろい法則です）楽をして調べたものは楽に忘れてしまうということです。

工学実験と人生では性質が異なりますが、ともに経験だけでなく読書が必要という意味で同じではないかと思います。また、どちらの読書も人から強要されても意味はなく、いろんな比較をしながら試行錯誤して自分に合う本を見つけることに意味があるのだそうです。